

選 評

藤田のぼる

今回は、残念ながら最優秀賞は出ませんでした。最終審査に残った作品はまずまず粒ぞろいで、楽しめました。ただ、パソコンのレイアウトにもう少し気を使ってほしいという感じを受ける作品もありました。まず、行数が多すぎて行間がせまく、読みにくいパターン。パソコン画面の場合、通常は横書きの設定になります。横書きだと、行数が多くても比較的読めるのです。ところが縦書きになると、ある程度余裕がないととても読みにくくなります。左右のスペースにもよりますが、A4で30から35行くらい。40行だと詰めすぎです。次に、作品の区切り方。特にある程度の長さの作品の場合は、ずっと続けるのではなくて、章に分けたり、場面が大きく変わる時は1行開けたりで、随分読みやすくなります。逆にいうと、そうした気遣いのない作品は、大きく損をすることになります。

さて、優秀賞の「early city」ですが、その構想力に感心しました。この作品は、基本的には幼少時から母親の期待を一身に背負って優等生であろうとした早川エミルの物語だといえます。しかし、そのエミルの死によってエミルをとりまく何人かの登場人物の物語が次々に浮かび上がっていきます。そして、それらの物語が重ねられて、ひとつの作品世界を形作っていくのです。これはなかなか高度な技で、母親や担任教師、友人の市川サツキに加えて、ストーリーの最後に大きな役割を果たすおばちゃん店主の人生までが視野に入っているのは、すごいと思いました。ただ、こうした作品にはありがちなことですが、そうした“仕掛け”の非凡さに対して、作品世界の最終的な焦点になるべきエミルの苦悩や母親との葛藤自体は、割と平凡というか、必ずしも心に響いてこないくらいがありました。作者がエミルという人物とさらにじっくり向き合う時間があつたなら、より磨きがかかったと思います。

奨励賞の2作は対照的な持ち味の作品で、主人公の思いの強さで読ませる「さよなら、ブルータス」に対して、「埃のジゼル」は言わば“作り物”としてのおもしろさで勝負する作品といえます。様々な謎に包まれた友人の従姉妹が住む別荘を訪れるという設定は、読者の期待を高めるに充分です。そしてこの作品のクライマックスは深夜の室内で目撃した“埃のジゼル”で、その描写力はなかなかだと思いました。ただ、何点か詰め甘いところがあり、例えば従姉妹の目が見えないことを事前に告げないというのはあまりに不自然ですし、はがきの宛名が印刷文字になっているというのがその伏線なのかもしれませんが、ちょっと無理があります。難しいことですが、自分の作品に適切にツッコミを入れて仕上げていくことが、特にこのタイプの作品ではとても大事なプロセスになります。

他に候補に残った作品の中では、短編の「自転車」が印象に残りました。例えば詩のような感じで文ごとに改行したら、この作品のリズム感がより生かされたように思います。